

第36回日本臨床皮膚科医会総会・臨床学術大会を終えて

(2020年9月21・22日, アクトシティ浜松, ホテルオークラ浜松, クラウンパレス浜松)

白濱 茂穂

聖隷三方原病院皮膚科

はじめに

このたび、第36回日本臨床皮膚科医会総会・臨床学術大会を、南関東山静ブロックとして静岡県浜松市で開催いたしました。2020年はコロナウイルスの影響を世界中で受け、開催予定の東京オリンピックも延期になりました。医学界も開催予定の学会、研究会などが中止や延期の処置がとられた年でもありました。本大会も当初は4月25・26日に開催予定でしたが、9月に延期となりました。しかしながら、コロナ禍での開催でしたので感染リスクを考え、現地開催に加え、Live同時配信、さらにオンデマンド配信によるハイブリッド開催といたしました。

南関東山静ブロックでの開催は、1987年第3回(故中野政男会頭)、1995年第11回(故加藤安彦会頭)、2004年第20回(加藤友衛会頭)、2008年第24回(長村洋三会頭)、2014年第30回(栗原誠一会頭)に

次いで6回目になります。初めて静岡県において本総会・学術大会を開催させていただき、たいへん光栄に存じております。このような機会をいただき会員の皆様方に心より感謝申し上げます(図1)。

テーマ：その素朴な疑問に答えたい

第36回大会テーマは「その素朴な疑問に答えたい」としました。私たちは、医学部を卒業後、数多くの進むべき選択肢の中より、皮膚科学を選びました。そして日々、皮膚科に関する基礎研究、皮膚疾患の診断・治療、患者さんの心のケアなどそれぞれの立場で従事しております。私が皮膚科医の第一歩を歩み始めたころに比べて、皮膚科のさまざまな領域で病因の解明、治療法の開発が進み、驚くべき時代の変化があったと思います。そのため、すべての領域の進歩についていくことはとても困難

なほど知識量が増えてきています。そうした中「いまさら聞けない? あのことは本当のところどうなっているのだろうか?」などなど、日ごろもっておられる些細な疑問があると思います。そこで、会員皆様同士が本音で意見を出し合っただけで、素朴な疑問ができるだけ解消されればと願ってこのテーマに決めました。大会に参加された皆様の診療において「浜松で得た知識」が少しでもお役に立てばと考えております。



図1 日本臨床皮膚科医会会長江藤隆史先生(左)と筆者

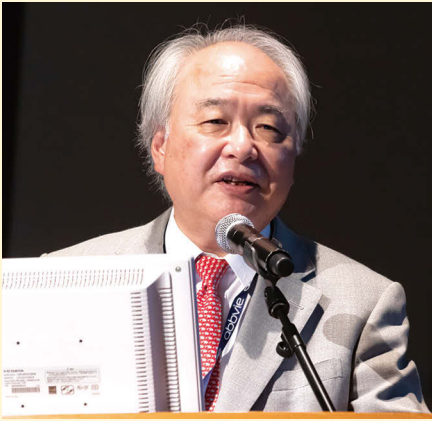


図2 戸倉新樹先生の特別講演1



図3 岩崎恭子さんの文化講演



図4 松本吉郎先生の特別講演2

学術プログラム

大会は特別講演、文化講演、シンポジウム、企業セミナー、ポスター発表で構成されています。

特別講演1は前・浜松医科大学皮膚科教授(現・浜松医科大学細胞分子解剖学特任教授)戸倉新樹先生にご講演いただきました(図2)。ご存じのように戸倉先生は日本だけではなく世界の皮膚科学会に大きな影響を与え、多大な貢献をされてきました。学問においても多くの疑問を解決された先生です。ご講演では、ご自身が直接関わりあいをもった患者さんから「今日的な皮膚疾患に辿りつくまで」というテーマで理論的にわかりやすくお話しいただきました。先生に供覧、解説いただいた疾患は1)リンパ腫、2)蚊刺過敏症(蚊アレルギー)、3)薬剤性光線過敏症、4)成人T細胞白血病/リンパ腫、5)IgG4関連皮膚疾患、

6)減汗性コリン性蕁麻疹、7)内因性アトピー性皮膚炎、8)B型肝炎ワクチンによるGianotti-Crosti症候群など多岐にわたりました。学問を究めていくとはこういうことなのだと感動いたしました。

文化講演は本来であれば開催されるはずであった東京オリンピックを記念して、静岡県沼津市出身の岩崎恭子さん(図3)に「泳縁(えいえん)」というテーマでお話しいただきました。岩崎さんは水泳を始めるとすぐに頭角を現われ、12歳で日本選手権に出場されています。1992年には14歳でバルセロナ五輪に出場し、競泳史上最年少で金メダルを獲得しました。「いままで生きてきた中で一番幸せです」。金メダルを決めたレースの直後に語られたこの言葉は、熱く国民の心に刻まれました。1998年の引退後も、水泳の指導や普及活動、さまざまな情報を発信されご活躍されています。14歳で金メダリストということで、華やかな、話題性のある場面しか印象にありませんでしたが、その後のご苦労、挫折について赤裸々にお話ししていただきました。途中水泳が嫌になった時期もあったが、水泳との出会いがいまを支えているという、私たちにも勇気を与えていただける講演になりました。

特別講演2は日本医師会常任理事の松本吉郎先生(図4)に「次期診療報酬改定について」というテーマでお話をいた



図5 ポスターセッション



図6 素敵な仲間たち

できました。松本先生は1980年に浜松医科大学医学部を卒業され、私の1年先輩になります。2016年6月からは日本医師会常任理事に就任され、診療と医師会活動にご尽力されています。超高齢社会を乗り切る必要があるという総括的なお話がありました。さらに、次期診療報酬改定では、働き方改革の進め方、団塊の世代の後期高齢者増加のため国費の急増と新型コロナ対策のための費用増大に伴う対応の必要性などのお話をいただきました。

35のシンポジウムはプログラム委員長の戸倉先生を中心に、各領域から幅広く現在の話題や問題点になるようなものをテーマに構成いたしました。各シンポジウムの座長、演者の皆様にはご快諾していただき、教育的なお話をしていただきました。さらに33の企業セミナーも開催されました。

一般演題はすべてポスター展示(図5)による自由討論形式で行いました。この状況下で70題以上に発表を行っていただきました。しかしながら、現地参加者のみが閲覧、議論できることになってしま

いました。デジタルポスターという方法もありましたが、今回はそこまでの準備ができず、現地参加できない方への配慮が十分でなく、たいへん申し訳なく思っております。ただ、企業展示会場では企業・団体の参加が約50社あり、参加者とのやりとりが行われていました。

おわりに

2020年は世界中がコロナウイルスに翻弄された年でありました。その中で、本大会の運営方法も修正、変更せざるを得ませんでした。最終的には現地開催、リモート参加、オンデマンド配信の構成といたしました。総会の形を整えつつ、現地参加者の感染防御の対応を議論し、安心・安全を確保することに尽力しました。

いざ、始まってみますと、医療関係者の集まりです。皆様意識も高く、感染予防のため多くのご協力を得ることができました。今回、オンデマンド参加者を含め1,300名以上の先生方に参加していただきました。閉会后、体調不良などの報告もなく、無事学会を終えられたと感じています。とても長い準備期間でしたが、いまはすべてよい思い出になっています。

事務局長の三田均先生、実行委員長の鈴木健司先生、さらに運営事務局の山田紀子さん、山本亜希子さんをはじめスタッフの皆様にはご無理を申し上げました。多くの皆様に感謝しながら筆を置きたいと思います(図6)。